

**社会参加の継続要因に関する調査****—家族を介護している高齢者に特化して—**

熊本学園大学大学院研究生 山城典子 (009415)

キーワード：高齢者の社会参加 社会参加の継続 家族介護

**1. 研究目的**

7割を超える日本の高齢者が、住み慣れた自宅や地域での生活の継続を希望しており、それに伴い心身の健康の維持が必要不可欠となっている。先行研究によると、社会参加が心身機能などにプラスの影響を与えることが分かっているが、その反面、家族の介護により社会参加や自由な時間が持てない現状があることも明らかとなっている。

地域在住の後期高齢者の社会参加の継続要因を研究する中で、家族の介護をしながら社会参加を継続した人の話を聞くことができたため、家族の介護と並行して社会参加を継続する要因と、阻害要因を明らかにする。

**2. 研究の視点および方法**

本研究において、社会参加を「フォーマル・インフォーマルを問わず家族以外の人との関わりを持っている状態」と定義する。

調査は、地域の中で生活し、社会参加を継続している熊本市在住の任意の75歳以上の高齢者、男女10名ずつを対象とし、半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は逐語化し、佐藤郁哉の質的データ分析法に基づきコード分析を行った。

**3. 倫理的配慮**

本調査は、熊本学園大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会の承認を得て実施した。

**4. 研究結果**

後期高齢者になった現在も社会参加を継続している20名のうち、家族介護の経験があったのは、男性が5名、女性が6名、その中でも、男性2名、女性1名が現在配偶者の介護を行いながら社会参加を行っていた。

過去に親や配偶者をみた経験があるという人は病院や施設を利用した人ばかりであり、現在介護中という人は自宅でみているという違いがあった。

発言を比べてみると、病院でみたという人の中には、介護をした・お世話をしたという実感がないという発言や、力を尽くしたといった内容の発言が聞かれた一方、現在介護中の人からは、病気をした被介護者も大変だが、自分もきついといった発言や、自分がしなければという義務を感じている発言、自分の都合よりも被介護者の介護が優先、や面倒を

みるのは自分の使命だなどといった自分自身で介護以外の場所に身を置いてはいけないと感じている発言も聞かれた。

継続要因としては、被介護者自身や被介護者に関わっている専門職から社会参加の促しがあったこと、介護をする時点で、義務的で責任を伴う自治会活動に参加していたこと、家族の協力があったことが挙げられる。

阻害要因としては、自分で介護しなければと思い、自ら社会参加の機会を絶っていること、自ら社会参加の機会を絶っている人は家族の協力が得られていないこと、現在介護を行っている人は在宅で介護をしていることが挙げられる。

## 5. 考察

継続要因で挙げた3つの要因のうち、被介護者にかかわる専門職からの促しや家族の協力に関してはすでに明らかとなっているが、自治会活動に参加していたという点は、これまでの研究では見られないものである。義務的で責任を負うという特徴を持つ自治会活動であるが、家族の介護を行っている人にとっては、その特徴が社会との関係性を保つ要因となっていたのである。

本研究における対象者の選定は、地域包括支援センターからの紹介や対象者自身からの紹介にて行っており、偏りがみられるという弱点を持つため、家族の介護を理由に自治会活動を辞める人が存在する可能性も否めない。しかし、家族の介護経験がある11名のうち8名が自治会活動を行ったことがあると答えており、自治会活動と家族の介護をしながらの社会参加との関連を一概に否定できないものである。

また、自立度の高い介護者に対する別居家族の支援が得られない点は先行研究と同じであり、さらに、現在後期高齢者である人々は、子どもたちに迷惑をかけたくないと思う傾向が強く、介護をしている間、自分はそれ以外のことに目を向けてはいけないと思込んでいる一面が見られた。これは先行研究にもあるように、周囲の目を気にしてのものと考えられる。

別居家族などの支援が得られずとも家族介護者の社会参加を促進していくためには、すでに明らかとなっているように、心理的 QOL の性差をふまえた支援に加え、介護者のペース配分型のコーピング、具体的には自治会活動や参加日程の決まっている趣味活動に参加するなど、多少義務的であっても、地域や社会とのかかわりを保つことのできる環境下に身を置けるよう、被介護者にかかわる専門職も含めて支援することである。また、そのことに罪の意識を感じないように、介護者が社会参加することに対する人々の意識を変え、介護者にも周囲は社会参加を否定していないこと、社会参加は自分自身の心身の健康を保つためにも必要な機会であることを理解してもらえよう支援することである。